

## 【論文】

## 保育現場が求める実習生像の分析

池田幸恭\* 伊瀬玲奈\*\* 岩崎淳子\*\*\* 大神優子\* 北村裕美\*\*\*\* 駒久美子\*  
佐野裕子\*\* 島田由紀子\* 眞鍋久美好\* 鈴木みゆき\* 高梨一彦\*

## A Study on Mentors' Images and Expectations of Practice-teachers

Yukitaka IKEDA, Reina ISE, Junko IWASAKI, Yuko OHGAMI  
Hiromi KITAMURA, Kumiko KOMA, Hiroko SANNO, Yukiko SHIMADA  
Kumiko MANABE, Miyuki SUZUKI AND Kazuhiko TAKANASHI

## 要 約

本研究の目的は、保育現場が求める実習生像を明らかにすることである。実習生に身につけておいてほしいことがらを尋ねる26項目を作成し、保育者214名に質問紙調査を実施した。保育現場が求める実習生像について、幼稚園と保育所および公立と私立という勤務先による特徴を検討した。さらに、保育現場での立場として、経験年数、職場内の立場、実習生の年間の受入人数を取りあげて、保育現場が求める実習生像との関係を検討した。分析の結果、次の3点が示された。第1に、保育現場が実習生に求めることは、「学ぶ姿勢・態度」と「保育実践のスキル」にまとめることができる。第2に、「学ぶ姿勢・態度」は、私立施設勤務者が公立施設勤務者よりも実習生に必要であると考えていた。第3に、「学ぶ姿勢・態度」は、園長、主任、保育士が幼稚園教諭よりも実習生に必要であると考えていた。以上の結果を踏まえて、実習指導および保育者養成について、「学ぶ姿勢・態度」を育てることを通して「保育実践のスキル」を身につけることができる指導が重要であること、保育現場が求める実習生像を実習生自身が知ることによって実習への意識を高めること、実習先の保育現場が求める実習生像を理解した上で実習生に指導を行なうことを提起した。

キーワード：保育現場が求める実習生像，実習指導，保育者養成

\*和洋女子大学 人間・社会学系心理学・教育学研究室 \*\*愛国学園保育専門学校

\*\*\*彰栄保育福祉専門学校 \*\*\*\*和洋女子大学生活科学系運動生理学研究室

## 問 題

保育現場における実習では、保育現場と保育者養成校との連携が重要になるといえる。森川・小畑・上野・塚本・木村・武藤・石井・鈴木（2007）は、幼保一元化施設や認定こども園、長時間保育や病児・病後児保育などの保育形態の多様化に対応することが保育者に求められると指摘する。このような状況の中で、保育現場が求める実習生像も多様化していることが予想される。保育者養成校には、実習先の保育現場がどのような実習生を求めているのかという理解に基づいた指導を学生に行うことが必要であると考えられる。したがって、近年の状況の変化を受けて、保育現場が求める実習生像について、実際に保育者に調査を実施して明らかにすることは有意義であるといえる。

保育現場が求める実習生像と関連して、塚本・木村・森川・上野・武藤・小畑・石井・鈴木（2007）は、実習生に対する懸念を保育士に調査している。そこでは、実習生に対する懸念は、「家庭の中での学生の経験内容の乏しさ、家事を経験していないことから体験不足となり、そこでの問題・弊害」と「遊び体験の不足により、子どもと遊べないこと」の2つに大きく分けられている（p.85）。そして、保育士は「保育者に必要な資質として技術の習得、人間の高まりを求めている」と塚本他（2007）は指摘している（p.85）。陶山（2007）は、「心身の発達に関する知識、技能を身に付けることは勿論のこと、礼儀・作法、言葉遣いなどもしっかり身に付けさせて実習に臨ませる必要がある」とし、実習生に求められるのは意欲的、積極的な実習態度であると述べている（p.45）。また、吉田（2007）は、実習園からの指摘事項や要望として、家事手伝いの経験、挨拶をしない、注意されるとふくれること、実習での目的意識、実習生らしいみだしなみ、実習中に園外に出る、菓子を食えることなどを紹介している。田爪・小泉（2009）は、「保育者からみた実習生のイメージ、すなわち保育者における実習生の意識の捉え方を含む実習生像」について検討している。そこでは、実習担当保育者の持つ実習生のイメージについて、SD法を用いて「明るく活発な性格や態度」、「優しく落ち着いた性格や態度」、「理性的で慎重な態度」、「子どもの主体性を尊重し、受容する態度」を見出ししている。さらに、実習担当保育者による実習生の能力や資質に対する不安として、「実習生の保育技術、知識に対する不安」と「社会人、実習生としての常識や態度に対する不安」を田爪・小泉（2009）は得ている（p.16）。このように保育現場が実習生に求める内容や、実習生に対する懸念や不安について指摘されてきたことから、実際に保育現場が求める実習生像に焦点を当てて検討することは有効であろう。

さらに、保育現場が求める実習生像に違いをもたらす背景を明らかにすることで、その背景を踏まえた上で実習指導を行なうことが可能になると考えられる。ここでは、実習先の保育現場は多様であり、保育者も様々な立場にあることから、保育現場が求める実習生像は保育者の勤務先や職場での立場（たとえば、園長など）によって異なることが予想される。また、幼稚園教諭が語る指導方法に経験年数による違いがみられるとの指摘（堀，1997）から、保育現場が求める実習生像についても経験年数による違いがみられる可能性がある。加えて、実際に何人の実習生を受け入れているかによって、実習生に求めることが異なることも予想できる。これらのことから、本研究では、保育現場が求める実習生像について、幼稚園と保育所および公立と私立という勤務先による特徴を検討する。さらに、保育現場での立場として、経験年数、職場内の立場、実習生の年間の受入人数を取りあげて、保育現場が求める実習生像との関係を検討する。

本研究では、保育現場が求める実習生像を明らかにするために、実習生に身につけておいてほしいことながらを尋ねる項目を作成し、幼稚園あるいは保育所に勤務する保育者の視点から回答を求める。保育現場

が求める実習生像が明らかになることで、実習先の保育現場がどのような実習生を求めているのかという理解に基づいた学生への指導について示唆を得ることができると考えられる。

## 目 的

本研究の目的は、保育現場が求める実習生像を明らかにすることである。そのため、以下の3点に沿って研究を進める。

- (1) 保育現場が求める実習生像を抽出する。
- (2) 保育現場が求める実習生像について、幼稚園と保育所および公立と私立という勤務先による比較を行う。
- (3) 保育現場が求める実習生像について、調査回答者の経験年数、職場内の立場、実習生の年間の受入人数という保育現場での立場による比較を行う。

## 方 法

### 調査回答者

回答を分析した調査回答者は、保育者214名であった。回答者の勤務先は、公立幼稚園34名、私立幼稚園59名、公立保育所52名、私立保育所67名、不明2名であった。

### 調査時期

2008年6月から12月に質問紙調査を実施した。調査実施にあたっては、「和洋女子大学ヒトを対象とする生物学的・疫学的研究に関する倫理委員会」による承認を得た。質問紙は首都圏近郊で開催された研修会などを利用して配布し、郵送によって回収した。

### 調査内容

#### (1) 経験年数

「3年以内」、「5～10年」、「10～20年」、「20年以上」という4つの選択肢から該当するものを1つ選んでもらった。経験年数が4年である回答者には該当する選択肢がなかったため、その場合には選択肢の横に「4年」と回答してもらった。

#### (2) 職場内での立場

「園長」、「副園長」、「主任」、「幼稚園教諭」、「保育士」という5つの選択肢から該当するものを1つ選んでもらった。該当するものがない場合には、選択肢の横に職場内での立場を記述してもらった。

#### (3) 実習生の年間の受入人数

「年平均\_\_\_人くらい」という回答欄を用意して、記載してもらった。

#### (4) 実習生に身につけておいてほしいことがらを尋ねる26項目

“実習生に身につけておいてほしいことがらを5段階評価で選んでください。”という教示のもと、実習生に身につけておいてほしいことがらを尋ねる26項目への回答を「必要でない（1点）」、「あまり必要でない（2点）」、「どちらともいえない（3点）」、「やや必要（4点）」、「絶対必要（5点）」の5件法で求め、

( )内の得点を各回答に付与した。質問項目は、先行研究（森川他，2007；塚本他，2007）と保育学を専門とする研究者間の討論に基づいて作成した。また、「いろいろなことに気がつく（観察力）」、「いろいろなことに気働きがある（行動力）」、「家族に愛されて育ってきた体験をもつ」、「家族を尊敬し感謝の

念を持っている」の4項目には、回答者が回答しやすいように“実習生を保育者として採用する場合を想定し○をつけてください”との教示を補足した。これらの4項目を別途検討するよりも他の項目と同一に扱った方が、保育現場が求める実習生像を包括的に理解できると考え、他の項目とあわせて分析を行った。

なお、最近の実習生について問題と思われることや、学生時代に必要な経験や学びに関する自由記述などもあわせて求めたが、本研究では取りあげない。分析に用いた統計パッケージは、SPSS16.0J for Windowsであった。

## 結 果

### 1. 保育現場が求める実習生像の抽出

分析に先立って、調査回答者の属性を確認した。経験年数は、選択肢外に「4年」と回答した回答者が2名いたため、「3年以内」という回答とあわせて「4年以内」として、勤務先とのクロス集計を行った(Table 1)。職場内の立場は、選択肢に該当するものがない場合の記述を「その他」として、計6カテゴリと勤務先とのクロス集計を行った(Table 2)。実習生の年間の受入人数については、回答を「5名以下」、「5名より多く10名以下」、「10名より多く15名以下」、「15名より多い」という4カテゴリに整理し、勤務先とのクロス集計を行った(Table 3)。

Table 1 調査回答者の経験年数と勤務先によるクロス集計

勤務先		経験年数				合計
		4年以内	5-10年	10-20年	20年以上	
幼稚園	公 立	2 (6.3)	3 (9.4)	5 (15.6)	22 (68.8)	32 (100.0)
	私 立	13 (25.0)	14 (26.9)	11 (21.2)	14 (26.9)	52 (100.0)
保育所	公 立	7 (15.2)	18 (39.1)	10 (21.7)	11 (23.9)	46 (100.0)
	私 立	23 (35.9)	23 (35.9)	10 (15.6)	8 (12.5)	64 (100.0)
合 計		45 (23.2)	58 (29.9)	36 (18.6)	55 (28.4)	194 (100.0)

注1：数値は、人数（勤務先における人数比）である。

注2：欠損値がみられたため、人数が調査回答者全体よりも少なくなっている。

Table 2 調査回答者の職場内の立場と勤務先によるクロス集計

勤務先		立 場						合計
		園長	副園長	主任	幼稚園教諭	保育士	その他	
幼稚園	公 立	7 (15.6)	2 (6.3)	2 (6.3)	18 (56.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	32(100.0)
	私 立	11 (20.0)	5 (9.1)	5 (9.1)	17 (30.9)	0 (0.0)	9 (16.4)	55(100.0)
保育所	公 立	0 (0.0)	3 (6.1)	3 (6.1)	2 (4.1)	37 (75.5)	2 (4.1)	49(100.0)
	私 立	0 (0.0)	4 (6.1)	4 (6.1)	0 (0.0)	53 (80.3)	7 (10.6)	66(100.0)
合 計		16 (7.9)	16 (7.9)	14 (6.9)	37 (18.3)	90 (44.6)	18 (8.9)	202(100.0)

注1：数値は、人数（勤務先における人数比）である。

注2：欠損値がみられたため、人数が調査回答者全体よりも少なくなっている。

注3：「園長」には「園長代理」が1名含まれている。

「その他」には、私立幼稚園勤務で「園主」1名、「主事」2名、「理事長」2名、「事務・経理」2名、不明2名が、公立保育所勤務で「臨時保育士」1名、「調理師」1名が、私立保育所勤務で「栄養士」2名、「管理栄養士」1名「調理師」1名、「看護師」3名が含まれていた。

Table 3 調査回答者の実習生の年間の受入人数と勤務先によるクロス集計

勤務先	受入人数	受入人数				合計
		5名以下	5名より多く 10名以下	10名より多く 15名以下	15名より多い	
幼稚園	公 立	27 (96.4)	1 (3.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	28 (100.0)
	私 立	28 (53.8)	17 (32.7)	6 (11.5)	1 (1.9)	52 (100.0)
保育所	公 立	29 (64.4)	11 (24.4)	1 (2.2)	4 (8.9)	45 (100.0)
	私 立	22 (37.9)	36 (35.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	58 (100.0)
合 計		106 (57.9)	65 (35.5)	7 (8.3)	5 (2.7)	183 (100.0)

注1：数値は、人数（勤務先における人数比）である。

注2：欠損値がみられたため、人数が調査回答者全体よりも少なくなっている。

続いて、実習生に身につけておいてほしいことがらを尋ねる26項目への回答の平均値と標準偏差(SD)を算出し、平均値が高い順にTable 4に示した。

そして、実習生に身につけておいてほしいことがらを尋ねる26項目への回答に、最尤法による因子分析を行った（プロマックス回転）。固有値1以上を基準に抽出した9因子から順次因子数を減らし、因子解を求めた。単純構造に近く、解釈可能な因子をできるだけ多く抽出した結果、2因子解を最適解として採用した。2因子解の因子パターンをTable 5に示す。このとき2因子によって説明可能な分散の総和の割合は、27.7%であった。

Table 4 実習生に身につけておいてほしいことがらを尋ねる26項目の平均値 (SD)

項 目	平均値	(SD)	人数
挨拶などのマナー、服装など	4.82	(0.43)	210
言葉遣いが適切	4.68	(0.49)	210
担任の指導を素直に受け入れる態度	4.66	(0.52)	212
子どもとのコミュニケーションがとれる	4.66	(0.51)	211
いろいろなことに気働きがある（行動力）	4.61	(0.54)	193
表情が豊かで物腰が柔らかい	4.60	(0.52)	210
いろいろなことに気がつく（観察力）	4.56	(0.54)	210
将来保育者（士）になりたい希望（意思）がある	4.53	(0.69)	193
指導の先生とのコミュニケーション	4.48	(0.61)	210
自分の実習を反省できる洞察力	4.42	(0.61)	212
部分実習への積極的にかかわり	4.40	(0.67)	209
反省を翌日の実習に活かせる実践力	4.33	(0.62)	211
掃除・洗濯などの生活体験	4.29	(0.70)	210
家族を尊敬し感謝の念を持っている	4.26	(0.76)	191
実習に対して自分の希望や意見が言える	4.25	(0.70)	210
子どもの記録がきちんと録れる	4.20	(0.64)	209
子どもの発達理解	4.12	(0.65)	203
自分の保育を考察し文章化できる	4.01	(0.62)	207
家族に愛されて育ってきた体験をもつ	3.84	(0.86)	193
子どもの姿から指導案が書ける	3.88	(0.72)	207
今の保護者を理解しようとする意欲	3.80	(0.79)	209
発達と遊びが結びつき実践できる	3.80	(0.67)	201
季節の遊びを知っている	3.80	(0.60)	203
昔話・わらべうたを知っている	3.71	(0.62)	205
子どもの無理な欲求にも論理的に説得できる	3.42	(0.82)	206
予め保育の場を学んできて知識がある	3.40	(0.82)	204

注1：各項目を平均値が大きい順に並び替えた。得点範囲は、1.00から5.00であった。

注2：0.50点を基準に破線による補助線を加えた。

注3：欠損値がみられたため、各項目に回答した人数は異なる。

Table 5 実習生に身につけておいてほしいことがらを尋ねる26項目のプロマックス回転後の因子パターン行列

	f1	f2	$h^2$	平均値	(SD)
<b>f1 学ぶ姿勢・態度</b>					
担任の指導を素直に受け入れる態度	71	-27	38	4.66	(0.52)
言葉遣いが適切	62	-14	32	4.68	(0.49)
いろいろなことに気働きがある (行動力)	62	-01	38	4.61	(0.54)
自分の実習を反省できる洞察力	56	07	35	4.42	(0.61)
表情が豊かで物腰が柔らかか	52	-04	25	4.60	(0.52)
いろいろなことに気がつく (観察力)	51	08	30	4.56	(0.54)
指導の先生とのコミュニケーション	48	03	25	4.48	(0.61)
反省を翌日の実習に活かせる実践力	46	10	27	4.33	(0.62)
家族を尊敬し感謝の念を持っている	45	06	24	4.26	(0.76)
将来保育士になりたい希望 (意思) がある	39	16	24	4.53	(0.69)
自分の保育を考察し文章化できる	39	24	31	4.01	(0.62)
子どもとのコミュニケーションがとれる	38	13	21	4.66	(0.51)
掃除・洗濯などの生活体験	35	03	13	4.29	(0.70)
挨拶などのマナー、服装など	28	-14	06	4.82	(0.43)
部分実習への積極的にかかわり	27	06	09	4.40	(0.67)
実習に対して自分の希望や意見が言える	27	23	19	4.25	(0.70)
家族に愛されて育ってきた体験をもつ	21	15	10	3.84	(0.86)
<b>f2 保育実践のスキル</b>					
発達と遊びが結びつき実践できる	-13	81	57	3.80	(0.67)
季節の遊びを知っている	-07	65	38	3.80	(0.60)
子どもの無理な欲求にも論理的に説得できる	-06	63	37	3.42	(0.82)
子どもの発達理解	-14	61	30	4.12	(0.65)
子どもの姿から指導案が書ける	09	61	43	3.88	(0.72)
昔話・わらべうたを知っている	04	49	26	3.71	(0.62)
予め保育の場を学んできて知識がある	07	47	26	3.40	(0.82)
子どもの記録がきちんと録れる	36	37	40	4.20	(0.64)
今の保護者を理解しようとする意欲	09	34	15	3.80	(0.79)
因子間相関	f1学ぶ姿勢・態度	f2			
	f2保育実践のスキル	50			

注1：因子負荷量と $h^2$  (共通性)、因子間相関の小数点は省略し、35以上の因子負荷量を枠で囲んだ。

注2：欠損値がみられたため、165名の回答を分析した。得点範囲は、1.00から5.00であった。

第1因子に高い負荷量を示した項目は、「担任の指導を素直に受け入れる態度 (.71)」、「言葉遣いが適切 (.62)」、「いろいろなことに気働きがある (行動力) (.62)」などであった。この因子は、担任の指導を素直に受け入れ、言葉遣いが適切で気働きがあるなど、実習生に学ぶ姿勢や態度を身につけておいてもらいたいという内容であると考えられる。そのため、この第1因子は「学ぶ姿勢・態度」と解釈された。

第2因子に高い負荷量を示した項目は、「発達と遊びが結びつき実践できる (.81)」、「季節の遊びを知っている (.65)」、「子どもの無理な欲求にも論理的に説得できる (.63)」などであった。この因子は、発達と遊びが結びついた保育実践や季節の遊びなどに関する知識、論理性など、実習生に保育を実践するスキルを身につけておいてもらいたいという内容であると考えられる。そのため、この第2因子は「保育実践のスキル」と解釈された。

実習生に身につけておいてほしいことがらについて因子分析を行った結果、保育現場が求める実習生像として、「学ぶ姿勢・態度」と「保育実践のスキル」という2種類が抽出された。

2. 保育現場が求める実習生像の勤務先による比較

因子分析の結果、抽出された「学ぶ姿勢・態度」と「保育実践のスキル」について回帰法を用いて因子得点を算出し、幼稚園と保育所の区分（2水準）と公立と私立の区分（2水準）を要因とした二要因の分散分析を行った（Table 6）。

「学ぶ姿勢・態度」では、公立と私立の区分で有意差がみられた ( $F_{(1,159)}=12.63, p<.001$ )。私立施設勤務者の得点が、公立施設勤務者よりも大きかった。

「保育実践のスキル」では、いずれの要因でも有意差がみられなかった。

Table 6 保育現場が求める実習生像の因子得点の勤務先による比較

		幼稚園	保育所	公私 区分の 主効果	幼保 区分の 主効果	交互 作用	得点差	
人数		65	98	F値 (df)	F値 (df)	F値 (df)		
f1 学ぶ姿勢・態度	公立	67	-0.47(0.88)	-0.17(0.93)	12.63***	1.33	0.86	公立<私立
	私立	96	0.17(0.89)	0.21(0.87)	(1,159)	(1,159)	(1,159)	
f2 保育実践のスキル	公立	67	-0.08(0.68)	0.08(1.19)	0.03	0.23	0.23	n.s.
	私立	96	-0.01(0.83)	-0.01(0.89)	(1,159)	(1,159)	(1,159)	

注1：数値は、回帰法による因子得点の平均値 (SD) である。因子得点は標準化されており、全体の平均値は0.00、SDは1.00である。  
注2：\*\*\*  $p<.001$ を示している。

3. 求める実習生像の保育現場での立場による比較

保育現場が求める実習生像の2つの因子得点である「学ぶ姿勢・態度」と「保育実践のスキル」の双方について、「経験年数（4水準：4年以内、5-10年、10-20年、20年以上）」、「職場内の立場（6水準：園長、副園長、主任、幼稚園教諭、保育士、その他）」、「実習生の年間の受入人数（4水準：5名以下、5名より多く10名以下、10名より多く15名以下、15名より多い）」をそれぞれ要因とした一要因の分散分析を行った。有意差がみられた場合には、TukeyのHSD法による多重比較（5%水準）を行った。

「経験年数」については、「学ぶ姿勢・態度」と「保育実践のスキル」のいずれにも有意差はみられなかった（順に、 $F_{(3,147)}=2.04, p=.11$ ； $F_{(3,147)}=2.52, p=.06$ ）。

「職場内の立場」については、「学ぶ姿勢・態度」で有意差がみられた ( $F_{(5,154)}=3.31, p<.01$ )。多重比較(5%水準)を行った結果、園長、主任、保育士の得点が、幼稚園教諭よりも大きかった(Table 7)。「保育実践のスキル」では、有意差はみられなかった ( $F_{(5,154)}=1.51, p=.19$ )。

「実習生の年間の受入人数」については、「学ぶ姿勢・態度」と「保育実践のスキル」いずれも有意差はみられなかった（順に、 $F_{(3,138)}=0.48, p=.11$ ； $F_{(3,138)}=0.07, p=.98$ ）。

Table 7 保育現場が求める実習生像の因子得点の職場内の立場による比較

		① 園長	② 副園長	③ 主任	④ 幼稚園教諭	⑤ 保育士	⑥ その他	多重比較の 結果
人数		21	14	10	24	81	10	
f1 学ぶ姿勢・態度		0.14	0.14	0.44	-0.65	0.08	0.12	④<⑤=①=③
		(0.91)	(0.63)	(0.65)	(0.97)	(0.94)	(0.79)	
f2 保育実践のスキル		0.06	0.02	0.53	-0.35	0.05	0.02	n.s.
		(0.76)	(0.76)	(0.85)	(0.81)	(0.94)	(1.05)	

注1：数値は、回帰法による因子得点の平均値 (SD) である。因子得点は標準化されており、全体の平均値は0.00、SDは1.00である。

## 考 察

本研究の結果、3つの目的に対応して次の3点が示された。

- (1) 保育現場が実習生に求めることは、「学ぶ姿勢・態度」と「保育実践のスキル」にまとめることができる。
- (2) 「学ぶ姿勢・態度」は、私立施設勤務者が公立施設勤務者よりも実習生に必要であると考えていた。
- (3) 「学ぶ姿勢・態度」は、園長、主任、保育士が幼稚園教諭よりも実習生に必要であると考えていた。

塚本他(2007)は、保育士は「保育者に必要な資質として技術の習得、人間の高まりを求めている」と指摘している。本研究において保育現場が求める実習生像として抽出された「保育実践のスキル」は「技術の習得」に対応し、「学ぶ姿勢・態度」は「人間の高まり」に対応していると理解できる。また、「学ぶ姿勢・態度」は、実習生に求められるのは意欲的、積極的な実習態度であるという陶山(2007)による指摘とも共通している。陶山(2007)は、「心身の発達に関する知識、技能を身に付けることは勿論のこと」とも述べているが、これは「保育実践のスキル」に対応する内容といえる。吉田(2007)が紹介する実習園からの指摘事項や要望も「学ぶ姿勢・態度」に含まれると考えられる。さらに、田爪・小泉(2009)は実習生の能力や資質に対する不安として、「実習生の保育技術、知識に対する不安」と「社会人、実習生としての常識や態度に対する不安」を得ているが、前者の「実習生の保育技術、知識に対する不安」は「保育実践のスキル」と、後者の「社会人、実習生としての常識や態度に対する不安」は「学ぶ姿勢・態度」との対応を指摘できる。このように、「学ぶ姿勢・態度」と「保育実践のスキル」は、これまで指摘されてきた保育現場が実習生に求める内容や、実習生に対する懸念や不安などとの対応もみられ、保育現場が求める実習生像を理解する上で有効であると考えられた。

また、「学ぶ姿勢・態度」と「保育実践のスキル」の因子間相関は.50と中程度であり、双方の内容は関連しているといえる。したがって、「学ぶ姿勢・態度」と「保育実践スキル」の双方が実習生には必要であるとする保育者が多いと理解できる。第1因子「学ぶ姿勢・態度」に高い負荷量を示した項目は、第2因子「保育実践スキル」に高い負荷量を示した項目よりも平均値が高い傾向がみられた。例えば、平均値が上位1位の「挨拶などのマナー、服装など(4.82)」は双方の因子に負荷量が小さいが、上位2位「言葉遣いが適切(4.68)」、上位3位「担任の指導を素直に受け入れる態度(4.66)」は第1因子「学ぶ姿勢・態度」に高い負荷量を示している。これに対して、平均値が下位1位の「予め保育の場を学んできて知識がある(3.40)」、下位2位「子どもの無理な欲求にも論理的に説得できる(3.42)」、下位3位「昔話・わらべうたを知っている(3.71)」は、いずれも第2因子「保育実践のスキル」に高い負荷量を示していた。このことから、保育現場では「保育実践のスキル」よりも「学ぶ姿勢・態度」が実習生に必要とされる傾向が大きいと指摘できる。この結果は、「学ぶ姿勢・態度」を示す実習生は「保育実践のスキル」も身につけるように努力すると考えられていることから「学ぶ姿勢・態度」が重視される、あるいは「学ぶ姿勢・態度」が伴っていない「保育実践スキル」は保育現場で疑問視されるためではないかと考察された。また、田爪・小泉(2009)は、「保育者は実習生に対して実習生としての基本的な態度や基礎的な実践技術を実習前に身につけることを期待している」とし、「子どもに関わる力は実習の中で身につけることが期待されていた」と報告している(p.21)。このことから、保育現場が求める実習生像としては、「学ぶ姿勢・態度」が優先され、実際の実習や保育実践を通して「保育実践のスキル」を本格的に身につけてもらいたいという背景があることも考えられる。

さらに、保育現場が求める実習生像における「学ぶ姿勢・態度」に保育者の勤務先や職場内の立場によ

る違いがみられた。これに対して、「保育実践スキル」には、保育者の勤務先や保育現場での立場による違いはみられなかった。「学ぶ姿勢・態度」は、私立施設勤務者が公立施設勤務者よりも実習生に必要であると回答していた。このことは、私立施設では施設による保育の特色がみられやすく、その特色を学ぶことが必要になるためではないかと考えられた。したがって、私立と公立という施設による区分ではなく、保育形態や保育方針などの保育の特色が求める実習生像と関係している可能性も指摘できる。また、「経験年数」や「実習生の年間の受入人数」は保育現場が求める実習生像との関係がみられず、園長や主任など職場内でリーダーシップを取る立場にある保育者が「学ぶ姿勢・態度」が実習生に必要であるとする傾向が大きかった。このことは、経験年数や実習生の年間の受入人数よりも、職場内の立場によって、実習生の見方や育て方に違いが生じることを示唆していると考えられた。

本研究の結果を踏まえて、保育現場が求める実習生像の理解に基づいた実習指導および保育者養成について、次の3点を提起する。

第1に、保育者養成校として、「保育実践のスキル」の指導にのみ偏るのではなく、学生の「学ぶ姿勢・態度」を育てることを通して「保育実践のスキル」を身につけることができる指導が重要であるといえる。

第2に、保育現場が求める実習生像を実習生自身が知ることで、実習への意識、特に「学ぶ・姿勢態度」を高めることである。吉田（2007）は、実習園からの指摘事項や要望を抜粋し、「これらを事前学習の資料として『保育のあり方』について事例研究をすれば、実習への意識を高めることに役立つ」と指摘している。保育現場が実際に自分たちに何を求めているかを実習生が知ることは、保育現場の視点から実習を改めて位置づけることにつながり、実習に臨む上で意義があるであろう。

第3に、実習先となる保育現場あるいは実習担当保育者が「学ぶ姿勢・態度」と「保育実践のスキル」をそれぞれ実習生にどの程度求めているかを理解した上で、実習生に指導を行うことである。ここでは、本研究で作成した実習生に身につけておいてほしいことならについて実際に担当保育者に回答してもらい、それを材料に保育現場と保育者養成校との連携を進めるということも考えられる。また、実習生に身につけておいてほしいことならを実習担当保育者が回答することは、保育者自身が求める実習生像や実習に対する指導観を問い直すことにもつながるといえる。

本研究の課題として、実習生に身につけておいてほしいことならを尋ねる質問項目を精選し、その妥当性を検討することがあげられる。今回抽出された2因子によって説明可能な分散の総和の割合は27.7%と低い値であった。保育現場が求める実習生像を「学ぶ姿勢・態度」と「保育実践のスキル」の2つにまとめることはわかりやすさと利便性という点では有効であるが、それぞれの実習生像に詳細なカテゴリーを設定することも可能であろう。保育現場が求める実習生像を構成するカテゴリーを整理した上で、質問項目を精選し、その妥当性を検討していく必要性が指摘できる。また、保育現場における保育形態や保育方針など保育の特色と求める実習生像との関係も予想される。さらに、保育現場における実習にあたっては、保育現場が求める実習生像に加え、保育者養成校における実習の位置づけ、実習生自身の保育観が相互に関係するといえる。したがって、保育現場、保育者養成校、そして実習生による3つの視点から実習という場と機会をとらえていく必要がある。以上の研究を進めることを通して、保育現場が求める実習生像の理解に基づいた実習指導および保育者養成を行い、保育現場と保育者養成校との連携を進めていきたい。

## 付 記

本研究は、和洋こども研究会で行われた研究活動の一部であり、平成20年度和洋女子大学研究奨励費(学内共同研究費)を受けて行われたものです。また、日本保育学会第62回大会(2009年5月17日、千葉大学)での発表をもとに本研究をまとめました。学会発表では、多くの先生方から貴重なご意見を頂きました。厚く御礼申し上げます。そして、調査にご協力くださった保育者の皆様に感謝致します。

## 引用文献

- 堀淳世. 幼稚園教諭が語る指導方法—経験年数による違い—. 保育学研究. 1997, 35 (2), p.60-67.
- 森川文子, 小畑秀樹, 上野美保, 塚本美知子, 木村常在, 武藤純一, 石井功一, 鈴木みゆき. 短大生の社会的スキルと生活体験に関する研究. 児童学研究:聖徳大学児童学研究紀要. 2007, 9, p.109-115.
- 陶山勝. 保育現場が求める積極的な実習態度の育成—4年間の「実習指導」の授業実践を通して—. 岩国短期大学紀要. 2007, 35, p.45-61.
- 田爪宏二, 小泉裕子. 実習担当保育者の持つ実習生のイメージと実習生に期待する資質に関する検討. 鎌倉女子大学紀要. 2009, 16, p.13-23.
- 塚本美知子, 木村常在, 森川文子, 上野美保, 武藤純一, 小畑秀樹, 石井功一, 鈴木みゆき. 保育者の実習生に対する懸念について. 児童学研究:聖徳大学児童学研究紀要. 2007, 9, p.75-86.
- 吉田ちず子. “望ましい保育者像をめざして.” 現代の保育学 6 保育実習・教育実習 第4版. 街井和江, 福岡貞子編. ミネルヴァ書房. 2007, p.109-120.

池田 幸恭 (和洋女子大学人間・社会学系助教)  
伊瀬 玲奈 (愛国学園保育専門学校)  
岩崎 淳子 (彰栄保育福祉専門学校)  
大神 優子 (和洋女子大学人間・社会学系講師)  
北村 裕美 (和洋女子大学生活科学系助教)  
駒 久美子 (和洋女子大学人間・社会学系非常勤講師)  
佐野 裕子 (愛国学園保育専門学校)  
島田由紀子 (和洋女子大学人間・社会学系准教授)  
眞鍋久美好 (和洋女子大学人間・社会学系非常勤講師)  
鈴木みゆき (和洋女子大学人間・社会学系教授)  
高梨 一彦 (和洋女子大学人間・社会学系教授)

(2009年9月24日受付 2009年10月13日受理)